

# Summer occupational therapy immersion program 2017 参加報告書

菅野 圭子

## KEY WORDS

Occupational Therapy, University of Southern California, Occupational Science, Education,  
Comparing Japan and the US

### はじめに

日本では1963年に作業療法の教育が始まった。欧米でリハビリテーションを学んだ医師や行政官がその必要性を強く認識し開設を後押しした背景により、日本の作業療法は必然的に医療職としてその職域を確立した。また、作業療法の基本的な概念や実際は米国から招聘された教員や米国にて教育を受けた教員が担ったが、1960年代の米国における作業療法は医学界に科学的根拠を示すため、筋骨格系、神経運動系、精神力動系と関連する障害を理解し取り組む事に焦点をあてたものであり<sup>1)</sup>、未だ日本の作業療法教育の中心を占めている。しかし、作業療法を取り巻く社会状況、医療・福祉システムは大きく変化し、そういった変化の中で教えている内容と臨床における作業療法に乖離を感じるようになった。日本の作業療法教育の基礎となった米国の作業療法は、日本より50年先に作業療法教育が始まっている。そこで、米国の現状を知る事が今後の日本における作業療法教育の方向性を検討する手がかりになるのではないかと考え、南カリフォルニア大学の夏期プログラムに参加し、日本と米国の作業療法の違いや今後の作業療法教育の方向性について検討した。

### 参加プログラムの概要

南カリフォルニア大学 (University of Southern California, 以下 USC) は1880年にカリフォルニア州ロサンゼルス市に設立された西海岸最古の私立大学で、George W. Lucas など多くの映画監督を輩出した映画芸術学部をはじめ経済、工学、医学など様々な分野で米国のリーダーシップを担っている。作業療法分野においても、1947年米国で初めて大学院における教育を開始するなど先駆的大学であり、Mary Reilly, Elizabeth Yerxa,

Florence Clark や Ruth Zemke など著名な教員が教鞭をとり、Jean A. Ayers や Gary Kielhofner など著名な作業療法士 (以下, OTR) を輩出してきた。現在においても、U.S. News & World Report in 2017 で全米第3位と質の高い教育、研究を行っている。今回参加した Summer Occupational Therapy Immersion Program (以下, SOTIP) は、USC が海外の作業療法実践者および学生を対象に、2014年から年に1回実施している4週間のプログラムであった。

#### 1. SOTIP の目的

SOTIP の目的は、1) 講義と臨床見学を通し、米国の作業療法に精通してもらう、2) 作業科学 (Occupational Science) と USC の最新の研究を紹介する、3) 作業療法、健康とウェルネスのより全世界的な見方を発展させる、4) USC の熟練教員や国際的な実践者達とのネットワークを作る機会を提供することであった。

#### 2. 実施期間と場所、参加人数

SOTIP は2017年6月30日から7月28日まで実施され、講義やグループ討論などは USC Health Sciences Campus で行われた。また、Keck Hospital of USC など10ヶ所以上の臨床見学が準備されていた。今年度はカナダ、ブラジル、英国、オーストラリア、中国、韓国、キューバなど14カ国から、50名が参加していた。

#### 3. SOTIP 内容と考察

SOTIP の概要を表1に示す。急性期から健康とウェルネスまで幅広い講義内容を、USC 教員、共同研究者や当事者らを講師として学んだ。また、はじめに講義で理論や考え方、最新の研究などを学び、次にそれを臨床にどう応用しているかを見学し、最後に関連する論文を小グループで討論し理解を深める構成となっており、参加者は講義が母国語ではないというハンディを持っていたとしても理解を深め

表 1. プログラムの概要

週	週毎のプログラム内容
	オリエンテーション 講義：Overview of OT in the United States (SOTI Instructors) The Growth of Occupational Science Around the World (Zemke R.) 1 Emerging Trends in Hospital-Based OT, & Power and Leadership in OT (Jordan K.) ワークショップ：Motivational Interviewing in OT (Díaz J.) Painted Brain (Arts and Creativity for Mental Health) (Leon D.) 小グループ討論：テーマ「Occupational Science」
	講義：Introduction to Sensory Integration Therapy (Gunter J.) Thriving as an Individual Living with Congenital Bilateral (Margetis J.) Canine (Dog) Facilitated OT Interventions (Solomon O., Bazley C.) OT and Early Intervention (Crowley K.) OT and Mental Health in the US (Pitts D., McIntyre E.) 2 OTs Emerging Role in Addressing Human Trafficking (Bae E., Suh E.) 臨床見学：Keck Hospital of USC (Acute Rehabilitation, Hand Therapy) Children's Hospital of Los Angeles (Pediatric Acute Care and Rehabilitation) Pediatric Therapy Network (Pediatric Clinic) 小グループ討論：テーマ「Higher Hospital Spending on Occupational Therapy is Associated with Lower Readmission Rates」
	講義：The Sensory Adapted Dental Environment Intervention for Children with Autism Spectrum Disorders (Cermak S.) OT and Primary Care Practice (Halle A.) The Lifestyle Redesign <sup>®</sup> Treatment Approach (Rice C.) Flip That SNF (Skilled Nursing Facility) (Rafeedie S.) 3 臨床見学：Ocean Therapy, Casa Colina Rehabilitation Hospital, Los Angeles Unified School District (School-based Occupational Therapy) 小グループ討論：テーマ「Sensory Adapted Dental Environments to Enhance Oral Care for Children with Autism Spectrum Disorders: A Randomized Controlled Pilot Study」 発表：OT Where I Am From
	講義：OT and Adapted Sports at the US Veterans Administration (Lenington C.) Return to Zero: OT and Maternal Mental Health (Hanish K.) Preparing for the US National Board for Certification in Occupational Therapy (NBCOT) (Winder M.) 4 The USC Well Elderly Studies (Blanchard J.) 臨床見学：The Children's Ranch Foundation (Hippotherapy, Horse-Assisted Therapy) Century Villages at Cabrillo (Homelessness Services, Mental Health) 小グループ討論：テーマ「Lifestyle Redesign Program: Conceptual Foundations」 発表：Final SOTI Capstone Presentations
	OT: Occupational Therapy

る事ができた。さらに、小グループ討論は米国教育の主流であるアクティブラーニングを用いて討論を進めるため自発的に学べた。どの講義も興味深いものであったが、参加者の多くが最終発表会で印象深い講義に挙げていた作業科学とその代表的な The Lifestyle Redesign<sup>®</sup> Treatment Approach, および米国の作業療法について紹介すると共に、研修後の考察を以下に記載する。

### 1) 作業科学

作業科学は1989年、USCに作業療法の博士課程が開設されるにあたり創始された新しい学問である。作業科学では、“人となり”とはその人が何かを選択する・選択しないと判断をする、日々何を遂行するかによって創られると考え、作業とは何か、作業を行う事の意味、作業を行う事が人や社会にどのような影響を与えるかなど、作業そのものや人と作業の関係などを研究対象としている。近年の研究の一つに The Lifestyle Redesign<sup>®</sup> Treatment Approach がある。この研究では、高齢者はどのように晩年を健やかに育むのかといったシンプルな疑問に端を発し、健康的なライフスタイルを構築することで慢性疾患を予防および管理し、健康およびウェルネスを改善するという Lifestyle Redesign<sup>®</sup> (介入法) の開発と、介入成果と費用対効果を証明した。人は作業により健康になるという作業科学の考えを証明した画期的な研究だと考える。

米国では作業科学の誕生後、作業科学を例えば心理学のように作業療法の基礎学問として発展させるのか、それとも作業療法は医学や心理学など基礎学問の応用科学だから基礎学問は必要ないとするのか等の議論を通し、作業療法とは何かについて深く考えるようになった。日本では未だ多くの作業療法教育で、作業を治療の手段として用いる方法を教えるに留まっている。私自身は基礎学問とすべきという作業科学に同意し、作業を多方面かつ深く学ぶため、作業科学を教育に導入する必要があると考える。

### 2) 米国の作業療法

成人から高齢者に対する作業療法は、内容的に日米差を感じなかった。ただし、日本の方が国民皆保険や介護保険制度のおかげで量的にも質的にも充実していると感じた。

一方小児と精神の領域では日米差を強く感じた。米国では小児の分野は人気も高く求人も多い。OTRは小児専門病院、リハビリテーションを専門とするクリニック、そして公的小学校などで働いていた。小児専門病院やクリニックにおける役割は概ね日本と変わらないが、米国では障害のある人の教育法 (Individuals with Disabilities Education Act) で、障害のある子どもが通常の教育カ

リキュラムにアクセスし、参加し、向上することを規定している。そして、それらを実現するための重要な役割を担う個別教育プログラム (Individualized Education Program) に関連サービスの一つとして作業療法が明記されている<sup>2)</sup>。そのため、OTRは全ての公的小学校に常勤で複数勤務し、カリキュラムに参加するための具体的な療育を、当事者、教員、そして家族に行っていた。他方精神分野では、1960年代に精神科長期入院患者の置かれている現状への批判、州立病院の費用負担増加などを背景として脱入院が進められた。その結果、精神科医療は地域で、当事者主体と大きく考え方を变化させた<sup>3)</sup>。その流れの中で現在作業療法は多くの州で Licensed Mental Health Practitioner と認められておらず、臨床で働くOTRは2.4%と厳しい状況に置かれている。

日本の小児領域で働くOTRの減少は、少子化が一番の問題であり、解決が困難な問題としか見ていなかった。しかし、研修を通し米国と比較することで、作業療法の領域拡大や縮小がいかに政策の影響を強く受けのを感じた。米国では既にアドボカシー教育が始まっているが、日本ではまだ一般的でない。作業療法にとって、科学的な根拠を示すのと同じくらい政策に反映される方法を考え、行動する事が重要である。そのため、アドボカシー教育も今後の教育に必要な点だと考える。

### 3) 新しい領域の可能性

健康およびウェルネス領域は領域の広さといった点でも注目され、米国における成功が日本の作業療法の道標になるのではないかと考える。また、小児教育の場における米国の成功も実現可能な注目領域だといえる。日本でも学習の困難さに教員のみでなく専門家の支援が必要な事は制度に反映されている。今後は職場の開拓という意味でどう制度に反映させることが出来るかだと思う。

最後に、活躍の場を制限されている精神科OTRではあるが、ホームレスの施設で新たな活動を始めていた。ホームレスは米国の大きな社会問題の一つだといえるが、抱える問題は精神疾患やドメスティック・バイオレンス、貧困の連鎖など多岐に渡り、そういった人々への作業療法的関わりを模索していた。米国でも発展途上の領域であるが、その可能性は日本にも共通すると感じた。

### 謝辞

本研修は、佛教大学教育職員研修の助成を受けたものである。また金沢大学医薬保健研究域准教授横川正美先生には、資料作成にあたり終始ご指導を頂いた。ここに深謝の意を表する。

**文献**

- 1) ギャリー・キールホフナー：作業療法実践の理論第4版，医学書院，pp 32, 2014
- 2) 斉藤由美子：通常のカリキュラムへのアクセスとそこでの向上 - アメリカ合衆国における障害のある子どものカリキュラムについての概念の変遷と現在の取り組み -, 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・世界の特別支援教育 24: 53-62, 2010
- 3) 三野宏治：日本の精神医療保健関係者の脱病院観についての考察 - 米国地域精神医療保健改革とそれについての議論をもとに -, Core Ethics 6: 413-423, 2010